





ビーチに出るとレトリバーを連れた人がいた。

hai!

軽く挨拶を交わしてそのまま海を見つめている...
また穏やかなカリブの1日が始まろうとしている。

今日も暑くなりそうだ...



駐車場に戻るとレトリバーがいた。
主人を待っているのだろうか？
カメラを向けると視線を合わせて...ウィンクした？！
「キレイに撮ってね！」
そう言われた気がした...



同じぐらいの速度で前を走っていた1台のold car
外装にツヤもなく、不思議なコトにナンバープレートもない...
改造車なのだろうか？
オーバーサイズの太めのタイヤがフェンダーからはみ出している。
数哩...後ろを走っていたが、もう少しペースを上げたくて前に出る...
と、運転していたのは品の良さそうな銀髪の老婦人！
このクルマと共に人生を歩んできたのだろうか？
ふと、そんな事を考えさせられた...



ヘミングウェイの家の近く、彼は大きなワゴンの屋根で微睡んでいた。

ともすれば焼きつくkeeyの日射しの中で...

メイワクそうなその瞳に拙い英語で話しかけた。

Are you happy?



そいつはメインストリートにいた。
強い日差しにも負けないぐらいの鮮やかなブルーで...
ハーレーにはあまり詳しくないが
その低く構えたプロポーションはカッコイイと思った。
力強く自信溢れる容姿に見とれていると...

なんだい？勝負するのかい？

そんなセリフが聞こえてきた。



日差しを避けて軒下の木陰で昼寝をしていた...
一匹のレトリバーが迎えてくれた。
「やあ、遠くから来たのかい？大変だったね...」
長旅を労うように...
いつまでも相手をしてくれた。



逃げようとはしなかった。幾ら近づいても...
ただ、カメラを構えて近づいてくる東洋人を警戒し、
決して視線を外そうとしない...

そこには王者の貫禄さえあった。



そこに佇んでどれほどの月日が経ったのだろうか？
艶やかで美しいフォルムで観る者を魅了し、
声援の中ゴールを目指して走り抜けたあの日も遠い記憶...
「もう終わったんだよな？」
やる気のある部品たちは今もどこかで活躍してるのだろうか...？
今はただ静かに眠るだけ...



まだ動いてるんだ？
思わずそうつぶやいてしまった。

くたびれてはいるものの...
半世紀以上走り続けてきた車体にはしたたかな輝きがあった。

速さじゃないんだよ。
どこまでも一緒に行こうぜ。
なあ、相棒！

そう諭された気がした。